

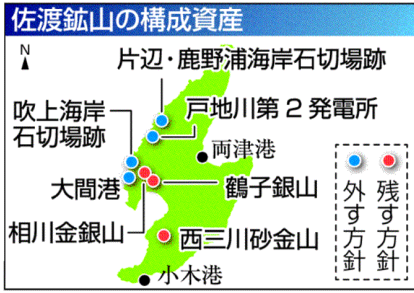
佐渡鉱山3資産に絞り込み

世界遺産 推薦書案見直しへ

2020年の世界文化遺産登録を目指す「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」の新たな推薦書案を巡り、七つの構成資産を三つに絞る方向で県などが検討していることが28日、関係者の話で分かった。佐渡独自の価値を説明しやすい資産に絞り、推薦内容を明確にする狙い。2日に都内で開かれる佐渡金銀山の学術委員会で提案し、了解を得る予定。

構成資産の大幅見直しは15年に初めて推薦書原案を文化庁に提出して以来初めて。関係者によると、残す方針の3資産は西三川砂金山と鶴子銀山、相川金銀山。400年以上にわたり稼働した佐渡鉱山の独自性を示す遺産群として、重要な位置付けとされる。一方、外成資産が世界遺産の評価基準に合っていることの論理的な説明などが求められた。

川第2発電所。鉱山の価値を示す上で部分的な要素とされた。17年7月に佐渡鉱山の国内推薦が3年連続で見送られた際、国の文化審議会は推薦内容に五つの課題を提示。世界遺産登録済みの鉱山遺跡に比べ佐渡独自の価値を明確にすることや、構成資産が世界遺産の評価基準に合っていることの論理的な説明などが求められた。



Q 金を中心とする佐渡鉱山の遺産群 相川金銀山など7資産で構成。400年以上の鉱山技術の変遷と、鉱山町の骨格が保たれている。1990年代後半に島の有志らが世界遺産登録に向けた取り組みを始め、2006年に県と佐渡市が文化庁に提案書を提出、10年に国内候補として暫定リストに記載された。しかし国の文化審議会では15年から3年連続で国内推薦を逃した。老朽化した施設の保全策や、価値の明確化が課題として指摘されてきた。

指摘を受け、県などは学術委員会メンバーの有識者らの意見を踏まえ、推薦書案の修正に取り組んだ。西三川砂金山と鶴子銀山、相川金銀山の3資産には、手工业から機械化による大規模生産へと発展した鉱山技術の変遷を示す遺産群が残ることから、価値の高さを説明しやすいとされた。関係者の一人は「国内推薦を勝ち取るためには普遍的な価値が明確な資産に絞ることが必要だ」と強調する。2日の学術委を経て3月末に推薦書原案を文化庁に提出する予定。今夏の国内推薦候補入りを目指す。外れる4資産の戸地川第2発電所は、佐渡鉱山に電力を供給した水力発電所。大間港は鉱山の搬出などに使われた。吹上海岸石切場跡と片辺・鹿野浦海岸石切場跡は江戸時代、相川金銀山から産出した鉱石を細かくすりつぶす「石磨」（石臼）に使う石材の供給地だった。